

## 藤島秀憲

読まなくてはいけない

「ガニメデ」(二〇〇四年十二月 vol. 32)に掲載された「神のパズル」一〇〇首を読んで受けた衝撃は十二年たった今でも忘れられない。短歌は、ここまで出来るのかと唖然としたのだ。放射線科での検査、女川原子力発電所の見学、竹山広のことなど、時代と場所を越えて、多角度から原子力を歌った連作には次の歌が含まれている。

- ・胸部X線撮影受けたるわれの胸は○・一五ミリシーベルト被爆せり
- ・「原発事故取材安全マニュアル」を夫が持つこと知りをれど言はず
- ・原発から二十キロ弱のわが家かな帰りにて灯を消して眠りにつけり

「神のパズル」を巻頭に置く本書には『海量』『東北』『ひたかみ』『トリサンナイタ』『桜の木にのぼる人』より四〇〇首と講演録やエッセイが収められている。

柱は二本ある。原子力、そして息子。東日本震災と福島第一原子力発電所事故のあと、仙台に住んでいた大口は息子を連れて避難した。「神のパズル」で危惧していた事態が実際に起きたのである。大口と夫は東京生まれ、仙台には夫の仕事で住んでいた。ところが息子は違う

しかし息子は広瀬川を眺めて育ち、近くでとれた米や野菜を食べ、夏は七夕祭り、冬は雪遊びに夢中だった。息子のふるさととは、仙台になるはずだったのだ。昨年の3月11日までは。

と、大口は書いている。その息子は「故郷」の歌が大好きだという。

- ・なぜ避難したかと問はれ「子が大事」と答へてまた誰かを傷つけて
- ・いたましきものごとくに夫は言へどかはゆし息子の宮崎なまり

『トリサンナイタ』より二首引いた。現実を見ていると、つい見逃してしまう真実、できれば見逃したままにしておきたい本心を、捉えて隠さずに歌っているから圧倒的な迫力がある。それは大口が繰り返し歌い、

語る竹山広にも言えることだ。講演録「竹山広の歌」キリスト者として、父として」では、竹山のへ原爆を知れるは広島と長崎にて日本といふ国にはあらず」について次のように語っている。

これももしかしたら、東日本震災、それにともなう福島第一原発の事故を本当に知っているのは福島の人たちだけで、日本という国はその苦しみや悲しみを理解できていないのではないかということに通じると私は感じます。この歌にも、長崎を歌いつつどこか本質に届いているという竹山さんの鋭さ怖さが感じられます。「子が大事」を理由に避難しているやま、いさと部外者が原発事故を歌うことのやま、しさが、大口に真実と本心を歌わせていると思う。真実と本心を歌わなければやま、しは増すばかり。自分を傷つけることで救われているようなところがある。正直言つて、大口の歌を読むのは苦しい。読めば、「私は真実と本心を歌っているのか」と自分に問いかけなくては済まなくなるからである。ただ必要ない問である。だから大口玲子の歌は読まなくてははいけない。すいれん舎刊。税別一四〇〇円である。